

令和7年3月12日

目黒区教育委員会教育長 宛て

目黒区立東山中学校
校長 西田 友幸

令和6年度 目黒区立東山中学校 学校評価報告書

1 学校評価委員会の実施内容

- (1) 第1回実施日時 令和6年6月28日(金) 午後2時50分～午後3時40分
- ・学校経営方針、主な学校行事について
 - ・今後の連携について
- (2) 第2回実施日時 令和7年1月17日(金) 午後1時00分～午後2時00分
- ・学校評価アンケート集計結果考察について

2 参加者 校長、副校長、学校評議員5名

3 評価の結果等 ※四者…児童・生徒、保護者、地域の方、教職員のこと。

評価項目	◎（成果）、●（課題）、 ●（成果と課題の両者を含む）	次年度の教育活動の改善点	学校評価委員会での意見
I 学校全体について ・「学校の雰囲気」「教職員の対応」「学校と地域の連携」「教育活動全体」について	◎全ての項目において、生徒の肯定的評価が昨年度より上がった。特に「学校の雰囲気」「教職員の対応」については90%以上となり、「教育活動全体」に満足している割合も、昨年度より14P以上上がった。これは教職員が生徒に寄り添いながら主体的活動を促してきた成果と言える。 ◎保護者の肯定的評価は「教職員の対応」が10P上がり、90%台となった。教職員の肯定的評価も、昨年度に引き続き100%を維持している。 ●地域の肯定的評価は「学校の雰囲気」「教育活動全体」について昨年度より下がる結果となった。これは「判断できない」という回答が増えたためであり、さらなる情報発信の工夫が課題と言える。	・ホームページの「学校日記」や学校便り、学年便り等で学校の様子を伝えているが、地域の方には伝わりにくい部分もある。正門前の掲示板も活用しているが、住区センターや児童館にも掲示をお願いしたり、学校行事の案内や生徒の作品等を展示させていただくなど、地域と連携しながら情報発信の場を広げていく。また、ホームページ上の古い情報は更新し、レイアウトを見やすく工夫する。	
II 教育目標について ・「教育目標の設定」「内容の理解」について	◎四者ともに、肯定的評価の割合が昨年度とほぼ同じ又はやや上がる結果となった。これは今年度から始	・研究開発学校のグランドデザインに「教育目標の達成に向けた取組」を明記し、周知してきた。	

	った研究開発校の取組を、「教育目標の達成のため」と位置づけ、様々な機会を通して情報発信してきた成果と言える。	次年度は生徒の自己調整力を育む活動をさらに具現化し、自己肯定感を高めることでさらに教育目標の浸透を図る。	
Ⅲ 心の教育について ・道徳科の授業等における「命の大切さや思いやりの心を育む教育活動の充実」について	◎生徒と教職員の肯定的評価は昨年度とほぼ同じだが、保護者の割合は10P以上上がり、83%となった。これは教職員が命の大切さや思いやりに関する指導を行った際に、その状況を保護者に伝え、連携しながら指導してきた成果と言える。	・道徳科の授業は年間指導計画に基づき実施しているが、それだけでなく、生徒の実情に応じた心の教育を、全教育活動を通して実施する。また、教職員の言動が生徒の模範となるよう意識し、普段から互いに声をかけあう雰囲気を醸成する。	
Ⅳ 学習指導等について ・「学力の定着・向上に向けた授業改善」「学習用情報端末を活用した学習指導」について	◎生徒と教職員の肯定的評価は昨年度とほぼ同じだが、保護者の肯定的評価は「学力の定着・向上」で85%、「学習用情報端末の活用」で92%と昨年度より15P上がる結果となった。これはsmart timeの取組や学習用情報端末の活用場面を、授業公開や学年便り、ホームページの「学校日記」等で保護者に伝えてきた成果と言える。	・生徒の自己調整力を育みながら、学力の定着・向上を図るために、次年度もsmart timeで学習課題の振り返りと計画を立てる取組を行う。さらに、朝学習やkind time、放課後学習教室等で、生徒が自ら課題に取り組む時間を新たに設定する。授業では単元内で適宜自由進度学習を取り入れ、指導の個別化や学習の個性化をさらに進めていく。	
Ⅴ 体育・健康教育について ・「体力向上・健康の促進に向けた取組」について	◎生徒と教職員の肯定的評価は昨年度とほぼ同じだが、保護者の割合は10P以上上がり、91%となった。これは保健体育の授業だけでなく、給食便りや保健便り等を通して健康教育の様子を保護者に伝えたり、給食試食会を実施し、保護者の感想や意見・要望等を生かしてきた成果と言える。	・体力向上については「めぐろこカラダシート」を活用した授業改善を継続し、生徒が自ら課題設定、課題解決する力を育む。また、次年度も性教育の授業を実施し、生徒が思春期の心と体について正しい知識を得る機会を設定するとともに、学校と家庭が連携しながら指導できるよう保護者への情報発信を丁寧に行う。	
Ⅵ 特別活動について ・「学校行事や生徒会活動、部活動の充実」について	◎生徒、保護者、地域の肯定的評価はいずれも90%以上となり、保護者の割合は昨年度より12P上がる結果となった。 ●教職員の肯定的評価も95%であるが、昨年度よりやや下がる結果と	・合唱コンクールでは、有志合唱団の発表等、生徒と教職員がともに活動する姿が評価され、今後の教育活動を活性化するための1つの好事例となった。他の学校行事や生徒会活動においても、生徒	

	なった。これは学校行事、生徒会活動、部活動それぞれについて運営面での見直しが必要になった際に、教員間での共通理解が不十分なことがあったためと言える。	と教職員がともに活動しながら、保護者や地域との関わりを深めていけるようにする。また、そのためにも主幹・主任教諭を中心に、組織的に学校運営を行う体制を強化する。	
Ⅶ 学校生活全般（学習・生活規律）について ・「落ち着いて学習に取り組んでいるか」について	◎保護者の肯定的評価は１０Ｐ上がったが、生徒・地域の割合は昨年度よりやや下がる結果となった。これは、従来の講義形式の授業が減り、生徒が自ら考え行動する「自己選択学習」を進めてきた結果、他と協働しながら学ぶ機会が増え、生徒は「落ち着いた」という言葉にそぐわないと判断したためと考えられる。地域については「判断できない」という回答が増えたためと言える。	・個別最適な学びと協働的な学びを充実させるための授業改善が進み、従来の「教師」対「生徒」という学びのスタイルが変化してきた。教員はファシリテーターとして生徒の活動を支援しながらも、メリハリのある指導を行う必要がある。次年度は授業と評価の一体化についても見直し、授業改善をさらに進めていく。また、学校公開の機会を増やす等、保護者や地域に生徒の様子を伝える工夫をする。	
・「災害や事件・事故等の防止に関する安全教育」について	◎生徒、保護者、教職員ともに肯定的評価が９０％以上となった。これは、災害や事件・自己等の防止に関する行事が充実し、学校便りや学年便り、ホームページ等でその様子を伝えてきた成果と言える。	・今年度は救急救命講習を全学年で実施し、３年生で性教育の授業を行う等、例年以上に安全教育に力を入れてきた。１年生の気仙沼自然宿泊体験教室では、現地の方から話を伺い、生徒に災害対策を自分事として捉えさせることができた。さらに今年度は地域の避難所運営訓練を実施し、教職員も防災知識を得ることができた。次年度も、自分事として捉えられるような安全教育を実施する。	・学校公開日の受付で人手が足りないことがあり、安全面で気になった。特に平日はＰＴＡの協力を得るのも難しいので、用務主事や事務職員と連携したり、正門前に犯罪抑止となるような掲示物を置くなど対策を検討したい。 ・子どもたちの金銭感覚が昔とずいぶん変わってきている。インターネットを介して簡単に物を売り買いできる時代だからこそ、学校と家庭が連携して安全教育を進めていかなければならないと感じた。
・「中学校区の小学校や幼稚園との連携」について	◎教職員の肯定的評価は１００％となり、保護者の評価も１３Ｐ上がり、９４％となった。これは行事や授業だけでなく、校内研究でも情報交換する場を設ける等、これまで以上に連携を深めてきた成果と言える。	・小学校運動会でのボランティア活動は、昨年度よりも参加者が大幅に増え、生徒の自己肯定感を高めることができた。また、家庭科の授業の一環として近隣幼稚園で実習を行い、職場体験や運動	

		会でも幼稚園を訪ね、生徒の学びを深める活動を行ってきた。今年度から校内研究で小学校と連携を図り、授業公開や研究開発に関する情報交換を行ってきたが、次年度も継続し、義務教育9年間を見通した教育活動を実践する。	
VII 情報の発信について ・「学校の情報発信」について	●保護者、教職員の肯定的評価は90%以上になったが、地域の肯定的評価は90%を下回った。これはHome&Schoolやホームページの活用が進み、保護者はいつでもどこでも学校の情報を得ることが可能となったが、地域の方はHome&Schoolが活用できないため情報発信の方法を工夫する必要が出てきたためと言える。	・地域への情報発信は、ホームページや掲示板の活用、学校便り等の配布が主である。まずは先述の通り、各種お便りを地域の施設や掲示板に掲示させていただいたり、ホームページのレイアウトを見やすく整理する。また、生徒のボランティア活動をさらに推進し、地域の方と直接触れ合うことで情報発信につなげたい。生徒の活動の様子を教職員も見届け、各種お便りで紹介することで、さらに地域との関係性が深まると考えられる。	
IX 教員の人材育成について ・「教員の専門性と協働性及び教育公務員としての自覚を高める取組」について	●教職員の肯定的評価はやや下がり90%となった。これは教職員間で職務を通して互いに声を掛け合い、日常的にOJTの推進を図る雰囲気はやや欠けていたためと言える。	・教職員の個々の取組は丁寧で、学習指導や生活指導を通じた生徒との関わりや、保護者・地域との連携は概ね良好である。また、教職員間の風通しも良く明るい雰囲気だが、ミドルリーダーを中心とした組織的な取組はやや滞りがちである。次年度は45分授業で生み出された時間を活用し、教職員間の研修や打合せをする時間を意図的に設定し、ミドルリーダーを中心に学校を創り上げていく。	
X 教員の働き方改革について ・「組織的な業務の効率化・最適化」について	●教職員の肯定的評価は10Pほど下がり、80%台となった。昨年度に比べ、勤務時間が平均60～90分ほど短くなり、これまでより負担感は減少した。一方、今年度から始まった研究開発の業務は一部偏ってしま	・時差勤務や在宅勤務の推進、電話対応時間の短縮化、部活動の外部委託やテスト採点のCBT化等、徐々に業務改善が進んでいる。一方で、各分掌や研究開発の業務における組織的な取組や、休	・部活動の外部委託について、子どもたちからは「専門的な技術指導が受けられるようになって良かった」という声を聞いている。一方、一部の保護者からは、「顧問と指導員との連携

	った。組織的な学校運営が課題と言える。	憩時間の確保が課題となっている。次年度の組織編成にあたり、各分掌や研究開発の業務を見直し、研究については新たな組織を立ち上げる等、改善を図る。また、休憩時間は教員が授業の空き時間を活用し、自分で設定するとともに、教職員間で共有できるようなシステムを整える。	にやや不安を感じている」という声を聞いた。外部委託が始まりまだ日が浅いので、連携を密に進めてもらいたいと思った。
XI 服務事故の防止について ・「組織的な服務事故防止」について	◎教職員の肯定的評価は90%以上となり、概ね良好な結果と言える。これは、東京都教育委員会の資料やスライドを活用しながら定期的に研修を行ってきた成果と言える。	・年度当初や長期休業前の服務事故防止研修だけでなく、テスト期間中の呼びかけや、服務レターによる注意喚起等を行ってきた。次年度も引き続き、教職員同士で互いに声を掛け合う雰囲気を作っていく。	